

學校と家庭

石田正

ヶ月に亘る暑中休暇を志の疎通があつてはならず、つて各小学校とも今日から一齊に第二學期に入り、機關が重大な役割を演ずることになる。父兄會（保護者會）懇談會、母の會、児童の教育は、學校と家庭訪問、家庭通信等が舉

学校側から家庭への希望としては、次のやうなことか特に氣付いた所であります。

峠のふもとの、學校から
いま歸り来る、少年が
寫生してゐる、僕のそば
何か拾ひつゝ、近づきぬ
片手に提げた、麻ぶくろ

腐れた氣持になつて『まじ癪に觸つてならないのでは
めになつて、世渡をしよう

耳鼻咽喉科

吸人用酸素
度量
モノサシ
マス
三里
体温器

難波醫院

卷之三

日祭關

に外ならない。児童の縦て
を、やたらに點數を以て評
價したがる。全く困つたも
のです。

貴室へ入るなり女房へも告
すに便所の窓から抜出して
うまく其時は逃おはせたも
のゝ此頃となつては、もう
で、社長や重役達に姿を現
さしてやつてゐるのに自分たちが食事に備
えたりかと心配する。さうして、

やうに身投げやうに身投げをさうな身構へをした。い瞬間に、肩屋は『アツ』と呼んで立つた。

初秋の旅行

上 石田正

下 宇津木三四郎

「学校と家庭」

一ヶ月に亘る暑中休暇を了つて各小學校とも今日から一齊に第二學期に入つた、時節柄好個の読み物であらう。（一記者）

児童の教育は、學校と家庭とが連絡提携して始めて良好なる結果を見ることが出来ます。從來は先生が主である、教へるものであつたのが、今日では児童が主で、何かを追求するものであります。児童が主であると云ふ觀方が著しくなつて來た。そして先生はいつも児童の進んで行く方向を監視する言ひ換へれば、児童の個性に基いて之を遺憾なくどこまでも助長するやうに指導するのです。

そのためには、學校と家庭とが全く別個のものではありません。學校の延長は家庭で、家庭の延長は學校と、二にして一つの關係を望む處であります。ものに譬へるなら、薦芽の大太陽と雨です。暖の光をいっぱいに浴び慈の露を充分受け新芽はすくすくと伸びて行くやうに児童は學校に家庭に愛の翼に包まれてぐんぐん育成するとのことです。學校と家庭とが二にして一つの關係を保持するといじり始め思はれる中に終つてしまふやけに長いのや短いのが思はれる中にあるといつて雜次から次へと入つてきて雜春の季節が半年もあるいゝ

上 するのにその間に少しの志の疎遠があつてはならない。そこで常に容易な通話が重大的な役割を演ずることになる。父兄會（保護者會）懇談會、母の會、家庭訪問、家庭通信等が舉られる。併し父兄の方々は夫々忙しい職務があるとですから、直接私達と見を交換したり、児童の習態度を見たりすることになります。児童が主で、仲々難かしい。これらの家庭訪問、家庭通信が、廣く利用さる。會と云ふことで、年一回か二回のこであるから、愛兒のためめて寸時でも出席して欲しいものです。

現在一年六十餘名を擔する私は、一週間乃至三週間に一回の家庭通信を續けて居ります。學校から家庭への通信から學校への二つの観察事項、要求、或は意見を交換して指導資料と致します。（大綱總ての方方に成績が宜しくなつて來ました）ところで學校と家庭側は決して別個のものではありませんが、勿論、主と云ふことと云ふ關係でもあらませませんが、何せ學校側は教育専門家で家庭側は大部分が玄人であります。家庭側から學校側から珠筆がけずり終る。古くてクチャ／＼になつた地圖をひろげる

「仕事の時間が一時間で休みの時間が十時間もあればいいなア」

三四郎はそう思ひながら机いづばいに地圖をひろげる

的に出て、教育に對する見、學校でやつてゐる教の實際等を紹介したり、次すべき事柄を心よく指することにつとめてゐます。

先づ家庭でのお仕事ですが、適當の豫習と復讐をさせる程度でありたが、下闇に余り力を加へすと、どうも明日の學校の授業に注意の散漫をさす虞があるからです。そうであれば、適當の字引を興へて自學させるべきです。特に低學年於ては、只よい意味に於ての癖をうける程度で宜いだらうと出来れば、ひひます。

この指導に當つては、同じ方針を以て指導頂き、それにどんな夢があつても、励みもつゝやうに心掛ることです。

よく耳にするのは、「はんとに家の子は乙ばかりでね……」と/or「父兄が見えね……」又たま／＼父兄が見えても、すぐさま「先生、家庭のはどんなものでせうか」と結構御座いますわね」と言ふ。『どんなんものでせうか』は意味の深い言葉ではあるが、實際は至極簡単で、學業成績のことだけを言ふてゐる

(少年詩)
島田忠夫
峰の少年

早や秋風も、身に沁みる
峰のうへの、ひとつ道
むかふに見える、八ヶ嶽
八つの峯に、雪白き
峰のふもとの、學校から
いま歸り来る、少年が
寫生してゐる、僕のそば
何か拾ひつゝ、近づきぬ
片手に提げた、麻ぶくろ
道にかゞんで、ちよい
／＼と
ガラスの破片 栗のいが
ごつごつとした、石拾
ふ
それにせつせと、危險物
拾ひつゝ行く、少年に
『もし／＼君よ、この道
は 往々もさうは、なからう
に』
樵夫の子でも、あるらし
い 少年やがて、にごとして
『裸足でゆきゝ・するえ
や 馬が難儀を、しますから
』
あゝ何といよ、うるはし
さ 僕は寫生の、手をやすめ
しばし見送る、少年や
馬が難儀を、しますから
うみはじめてくる
そんな時、窓の外の二月
近い空に、タコがうなつて
のやうものなら、三四郎の
眼はたはいもなく引きび
眼されてしまふのである
仕事と言ふものは不思議
なもので、こんな風にして
みると、面白い様にはかど
らない

峰の少年

珠雲 小野勝平
雨除漁々漁前霧
來去雲煙暮色迷
乳鳥相呼林杪話
歸鴉遠在夕陽西

雨餘暮鳥

△國民法律九月號（一期）
五錢 東京芝之區一木
町ノ四七其社）

△小説 説

誰が殺したか

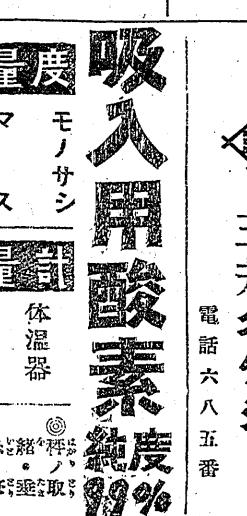
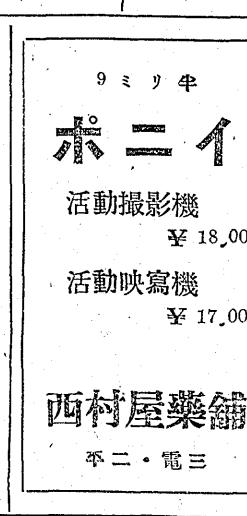
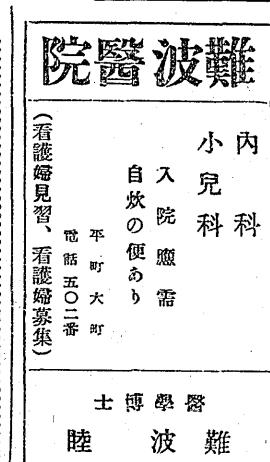
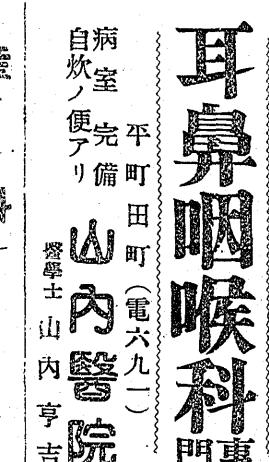
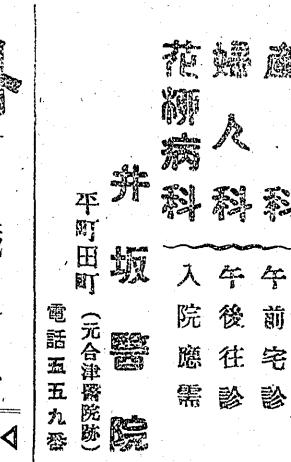
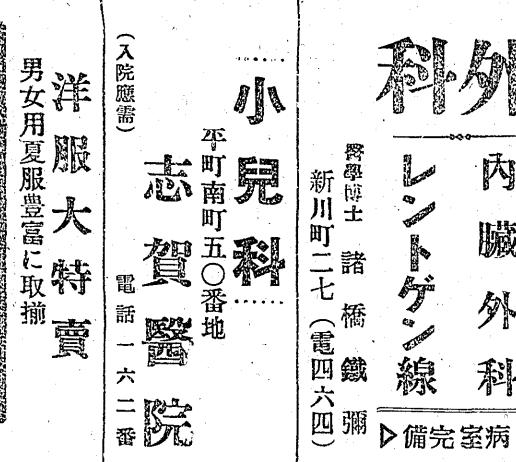
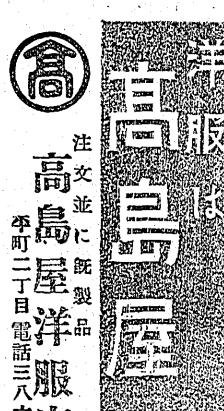
（112） 今野賢三著
龍造寺勝彦画

第二の殺人（六三）

向島の土手から隅田川
真暗な秋の夜であつた
ながめながら人眼にのつか
やうに小さくなつて同じじ
を行つたり惑ひたりしてゐ
一人の男があつた
その男は誰もらう層屋
なのだ

先の晩「米久」に入つて
川刑事がゐるのに吃驚し
外へ出たが女房に對する
練で一緒に連出したもの
ふと又、後からつけられ
しい聲が通つて行く
傷ましくもベンをにぎ
て働いてゐるフリの中の
間に三四郎は限りない空
の線をひつぱつて今朝
やつと二十枚目の資材

ヒグの中から顔をのぞ
せた主任の似顔にタテ
コの線をひつぱつて今朝
だが三四郎も、その中
一人である



可認物便彙三編

三

ふ競に煙水

の養蠶家の向くから
取引況次の如し
（一）出廻一、
貢貞六三〇匁 高四
安三八、八〇錢
九〇錢（一）
一六六貢高四
錢 安三七圓 刷
八〇錢

全身變色 黃疸に心
一時 に處黄疸に心臟麻痺したもののだが一時
に増す に變色した無氣味さ
同販賣成績 に宿人が直に醫
の に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
野三〇俵一、 小松崎重藏(西四)は
(平窪一號)一四 午後十時頃突然全
一六三錢 (同) になつて冥土行き
の俵一一、六六錢 (同) に變色した無氣味さ
信組 六二俵一一
鐵 (鹿島) 三一俵 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
三八錢 (大野) に宿人が直に醫
七俵一一、五八錢 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
ノン に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
拂つて家出。 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
消防改組 消 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
高坂方部)は從來 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
ノン 從幕員より成る に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
隊であつたが昨一二 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
年消防組に改組二 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
ノン 同字理髮業安齊 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
小頭に任命、消防 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと
組の總員は三十九 に處黄疸に心臟麻痺したものがあつたと

心臓癲渾と判るは簡易ホーテル、木質の響動不審の木縣溝村大字幕三十庵人遠藤一（木川）は全身上に吃音が生じ、師に九日夜行きが家から賣り渡す萬年筆等をかみ切る事なく、吃音が同人は百姓で、吃音が初容易に口を閉じて、吃音が身に付く。吃音が是に大に大きくなる。

野荒し三書籍泥が端緒 昨日検舉 第一回 割決定發表 待望の天下堂

新田町	廣榮	東京本店	日出五郎
新田町	廣榮	高橋	日没六〇
新田町	廣榮	高橋	潮前六五
新田町	廣榮	高橋	潮後六六
新田町	廣榮	高橋	元農銀
新田町	廣榮	高橋	天下堂品を贈呈す
新田町	廣榮	高橋	少くな上に開くが
新田町	廣榮	高橋	一掃す
新田町	廣榮	高橋	名
新田町	廣榮	高橋	さる
新田町	廣榮	高橋	で
新田町	廣榮	高橋	改修工
新田町	廣榮	高橋	赤三郎
新田町	廣榮	高橋	七才
新田町	廣榮	高橋	十一日
新田町	廣榮	高橋	万年筆
新田町	廣榮	高橋	竹信一
新田町	廣榮	高橋	電話所へ
新田町	廣榮	高橋	をかつ
新田町	廣榮	高橋	前半町
新田町	廣榮	高橋	賀り飛
新田町	廣榮	高橋	り込み
新田町	廣榮	高橋	並に大
新田町	廣榮	高橋	べの結
新田町	廣榮	高橋	白した
新田町	廣榮	高橋	た石城
新田町	廣榮	高橋	程創立
新田町	廣榮	高橋	棋聯盟
新田町	廣榮	高橋	秋季大
新田町	廣榮	高橋	を来る
新田町	廣榮	高橋	午前十
新田町	廣榮	高橋	九月七日迄
新田町	廣榮	高橋	ノモノ十八才ヨリ
新田町	廣榮	高橋	(住)込通勤自
新田町	廣榮	高橋	十五圓(事)
新田町	廣榮	高橋	夏ハ冷タヌキ
新田町	廣榮	高橋	おでんハ當
新田町	廣榮	高橋	き薄幸日△
新田町	廣榮	高橋	如し△七
新田町	廣榮	高橋	大異なる
新田町	廣榮	高橋	果を擲げ得る
新田町	廣榮	高橋	染むし輕便
新田町	廣榮	高橋	ぐに手段なく
新田町	廣榮	高橋	如し△七
新田町	廣榮	高橋	の次階に依る
新田町	廣榮	高橋	放つ矢は的的
新田町	廣榮	高橋	失ふ五黄
新田町	廣榮	高橋	も静かに治る
新田町	廣榮	高橋	榮わ
新田町	廣榮	高橋	獨

會費食事付五十
二十等まで貰
ると同好の茶會
むる